

ヒューマンインタラクションとアート・スペース

HUMAN INTERACTION AND ART SPACE

プロジェクト代表者：伊藤博明（教養学部・教授）

Hiroaki ITO (Faculty of Liberal Arts, Professor)

はじめに

本研究においては、近代的アート・スペースの生成から始めて、とりわけ 20 世紀におけるアート・スペースの変容について、ミュージアム系（伊藤博明 [教養学部・教授]・上村清雄 [千葉大学文学部・准教授]）、シアター系（市橋秀夫 [教養学部・准教授]）、オルタナティブ系（外山紀久子 [教養学部・教授]）、という各分野から考察を行った。

その際に、アート・スペースの中核的部分を担う、展示作品・展示物やパフォーマンスに関わる側面だけではなく、その周縁的部分に位置するロビー・カフェ・レストランなども含めて、アート・スペースについて多角的かつ総体的に考察を進めた。また、アート・スペースが地域社会において果たしてきた機能について、および、国や地方自治体の文化政策や文化行政がその利用形態の変容にどのように関わってきたのかについても歴史的に考察した。研究組織者のうち本学教員がおこなった具体的な研究は以下のとおりである。

I ミュージアム系（伊藤博明）

1 ミュージアムの創成期に位置づけられる、17 世紀イタリアのアルドロヴァンディ博物館（ボローニャ）や 18 世紀イングランドのアシュモリアン博物館（オックスフォード）などを研究対象として、ミュージアムがさまざまな「もの」を媒介とした一種の私的な社交的空間として始まり、それが「もの」を陳列・公開する公共的な空間へと変容していった経緯について考察した。

この研究成果の一端は、埼玉大学重点研究「ヒューマンインタラクションの解明に基づく人間支援の脱領域的研究」キックオフシンポジウムにおいて、「蒐集と社交—イタリアにおける近代的ミュージアムの誕生をめぐって」（2006 年 7 月 18 日、埼玉大学）と題して発表した。また、この研究に関わる成果の一部としては、ポーラ・フィンドレン『自然の所有—ミュージアム、蒐集、そして初期近代イタリアの科学文化』（共訳、ありな書房、2006 年）、および、リナ・ボルツォーニ『記憶の部屋—印刷時代の文学的—図像学的モデル』（共訳、ありな書房、2007 年）の翻訳が挙げられる。

2 現代のアート・スペースについて、いくつかの事例研究をおこなった。すなわち、①ロンドンの自然誌博物館、ロンドンの科学博物館、ハリファックス（イングランド中部）の「ユーリカ」などでは主として子ども・青少年を対象とした英国の新しいプログラムについて、②札幌芸術の森・野外美術館、および「モワレ沼公園」（札幌）では野外にある美術的空間について、③秩父地方の建築物ツアーにおいては、地域における芸術的作品の社会的機能

について、それぞれ調査・研究を行った。

以上の研究成果の一部は以下の機会に発表した。①北海道大学大学院文学研究科芸術学講座・研究交流会「ヴィジュアル・カルチャー研究の現在」における報告「アビ・ヴァールブルクのアクチュアリティ」(2006年7月26日, 北海道大学), ②日本学術振興会・人文社会振興プロジェクト「ミュージアムの活用と未来」研究グループによる研究発表会における報告「野外ミュージアムの可能性」(2007年2月4日, 科学技術館)。

II シアター系(市橋秀夫)

本年度は、アート・スペースとしてのシアター(劇場)の変容について、二次文献から歴史的な変化をおさえる基礎作業をまず行なった。イギリス(イングランド)の場合大きく分けて、常設小屋設立以前の演劇上演、近代初期における劇場、18世紀における劇場、19世紀以降における劇場、そして20世紀における劇場では、その社会的位置づけとともに、観客と舞台・パフォーマンス・演技手との関係や、劇場でのソシアビリティ(社交性)も大きく変化している。そして福祉国家の成立とともに国家的な文化政策が展開されるようになった1940年代以降になると、社会に貢献する(納税者である住民ニーズに応える)劇場というかたちで、シアター・スペースでのヒューマン・インタラクションはふたたび再編されていくことになる。

1 中世から近代初期まで

ヨーロッパでは10世紀に、イースター・サンデーのミサの一部としてキリスト劇が教会の内陣で上演されるようになったと言う。14世紀には、聖史劇 *mystery play* が市中でも演じられるようになり、イングランドでは「ページェント」と呼ばれる移動舞台上で上演される聖史劇が登場している。なかでも有名なヨーク劇は48場からなり、街の一定の場所で一場ずつ上演内容に関連する職人集団によって演じられては次の地点に移動した。15世紀には道徳寓意劇 *morality play* がプロの旅芸人によって囲いのある仮設屋外円形劇場内で演じられるようになったという。舞台と観客スペースはオーバーラップし、演じる者も観る者も上演中移動しつづけたといわれている。

16世紀の第4四半期には、プロ劇団がアリーナ形式の屋根のない常設劇場小屋を所有し始めている。シェークスピアのグローブ座もこのときロンドン・テムズ川岸に建設されている(1599年)。観客は土間に座り、舞台は2メートルほどの高さに設営されて中央に張り出し舞台を持ち、3層になる席料の高いギャラリー席がぐるりと劇場を取り囲んでいた。屋内劇場も同時期に存在し、より親密感のある空間を演出することができたという。17世紀後半、娯楽を敵対視したピューリタン支配下での劇場閉鎖が王政復古で解かれて以降、イングランドは劇場ブームに沸く。大陸ヨーロッパの劇場に比してイングランドのそれらは、「簡素で、小さく、騒々しかった」(S. Tidworth, *Theatres: An Architectural and Cultural History*, New York, 1973, p. 75)といわれている。

2 18世紀における消費者としての観客の台頭

イングランドの劇場は 18 世紀に入ると、都市の商業化がいつそう進展する中で「娯楽およびソシアビリティの中心」(J. Van Horn Melton, *The Rise of the Public in Enlightenment Europe*, Cambridge, 2005, p 162) となっていた。啓蒙時代の知識人である劇作家や演出家や演劇批評家は、劇場を世俗のもっとも効果的な道德教育の場と看做したがったものが少なくなかった。ところが実際の観客層は多様であった。そうした多様な客層をひきつけておくためには、啓蒙戦略では機能せず、上演はせりふ劇よりもスペクタクルやボードヴィルの隆盛に向かっていったという。こうした新奇さを求める消費者としてのイングランド観客は横柄かつ粗暴で、おしゃべりも野次もやむ事がなかったといわれている。またそうした粗暴さや横柄さは階級を問わない現象だったらしい。上流階級はといえば、上演開始後に来場して閉幕前にこれみよがしに劇場を立ち去るばかりでなく、舞台上に有料席を陣取る習慣を譲らず、俳優はその間を縫って演技をするありさまだったという。

3 静かな観客の誕生とソシアビリティの持続と外在化

以上ざっと見てきたことから分かるように、静かに鑑賞する観客の誕生は 19 世紀以降のこととなる。そして 20 世紀第二次大戦後、国家助成を受けるようになったイングランドにおけるシアター・スペースは、単なる演劇上演の場所であるだけでなく納税者である市民の娯楽とソシアビリティの場でもあることを要請されるようになる。だが今回は、芝居上演のホール内でそれが求められたわけではない。レストランやバー、あるいはギャラリー機能を持つラウンジ・スペースやフォイヤー（ロビースペース）の併設を劇場は求められるようになるのである（たとえば、R. Leacroft, *Civic Theatre Design*, London, 1949, pp. 118-21.）。18 世紀までは劇場のソシアビリティは上演と並存して上演の場に存在していた。しかし近過去から現在においては、それは上演の場に近接しながらも上演スペースの外部の劇場内スペースへと閉じ込められているのである。

III オルタティブ系（外山紀久子）

1 近代の芸術制度を支える劇場・美術館関連では、日本の劇場スペースとその社会内位置に関する事例研究として、文化経済学会（久留米大学）6/10-6/11/2006 で共同研究グループの代表として市橋秀夫と一緒に発表（「公立芸術文化施設の評価視点の再検討」）。個人研究分は「開館 10 年の創造的自主事業（舞踊・演劇・音楽）についての概観と評価の試行」として『公立芸術文化施設に対する評価視点の再検討——さいたま芸術劇場の開館 10 年をふりかえって——』（平成 17 年度成果報告書：埼玉大学・総合研究機構研究プロジェクト「公立芸術文化施設の評価調査——さいたま芸術劇場の事例研究」, 2006 年 8 月 1 日発行, pp.35-40 に掲載。独立行政法人日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト研究事業「日本の文化政策とミュージアムの未来：ミュージアムの活用と未来——鑑賞行動の脱領域敵研究」平成 18 年度報告書（2007/3/31）には「絵画の外部・内部と引き算のミュージアム」（83-90）を寄稿した。

また日本学術会議連携会員に任命され（2006 年 8 月 20 日, 任期は 2008 年 9 月 30 日まで）,

第 20 期哲学委員会のなかの「芸術と文化環境委員会」副委員長として、シンポジウム（「芸術の力？！——公共空間としての文化」（仮題））の開催等に向けて活動を開始している。

2 1960 年代、70 年代のアメリカのポストモダンダンスを中心に、近代劇場の外部に活動の場を求め、種々のオリタナティヴ・スペースの可能性を提起したアヴァンギャルドのパフォーマンスについてさらに考察を加え、学会や研究会などで発表した。

藝術学関連学連合第一回公開シンポジウム「藝術の変貌／藝術学の展開」（日本大学）6/17/2006 では舞踊学会代表として登壇し、ジャドソン・グループを継承する現代の動向にも言及した。概要は「舞踊の脱近代」として藝術学関連学連合ホームページ（<http://www.soc.nii.ac.jp/geiren/index.html>）に掲載されている。第 58 回舞踊学会大会（専修大学）12/2/2006 では、基調講演「彼（女）らは何をおそれていたのか？—ポストモダンダンスの逆説」を行い、また独立行政法人日本学術振興会「人文・社会科学振興プロジェクト研究：伝統と越境—とどまる力と越え行く流れのインタラクション—」のなかの「自己表象の生成と変容」研究グループ（早稲田大学 12/9/2006）や広島大学大学院教育学研究科・学習開発学講座講演会（広島大学 2/26/2007）でも講演し、領域横断的なポストモダンダンスが示唆する「アートのある場所」の問題に触れた。関連研究は早稲田大学 21 世紀 COE プログラム＜演劇の総合的研究と演劇学の確立＞のなかの「日本における舞踊学の確立」プロジェクトの講演要旨として、「ポストモダンダンス研究のために」（7/24/2003）の概要が『演劇研究センター 2006 年度報告書Ⅰ』（演劇研究センター，2007 年 3 月 20 日発行），p.45 に掲載された。

3 西洋近代の芸術概念を相対化し「アートの場所」を根本から問い直す「限界芸術」の実践に関しては、ポストモダンダンスと同時に近年の領域横断的なアートの活動を参照する形で研究を進めた。

国際芸術センター青森に招聘され松井茂（詩人）・中ザワヒデキ（美術家）と鼎談し（7/15/2006），概要は「純粹詩とサム（作務）アート」として『エフェメラル：遍く、ひとつの時』（国際芸術センター青森 アーティスト・イン・レジデンス・プログラム 2006/春）2006 年 12 月 15 日発行，pp.73-75 に掲載。広島芸術学会第 20 回大会（広島平和記念資料館）でシンポジウム「芸術学の変容—周辺領域からの提言—」に登壇（7/30/2006），概要は「＜ヴェクサシオン＞のあとで」として『広島芸術学会報 88』，2006 年 7 月 7 日に掲載された。